

文化論集第28号
2006年3月

消 息

山本定祐先生のご退職にあたって

山本定祐先生は長い間私たち後進にとってまぶしい存在だった。

私も既に大学院時代にはドイツ・ロマン派に関する著訳書や『ユリーカ』などに発表されたドイツ現代詩人についての先生の論考に触れており、その後付などから早稲田大学の教職に就いておられることは存じあげていたが、当時はまだお目にかかる折がないままに、かつて警咳に接したことのある先輩諸氏の話などを聞いて遠くから鑽仰していたにすぎない。なにしろ早くから日本ゲーテ賞を受賞しドイツに留学の機会を与えられたという、当時の早稲田大学独文出身者には珍しい経歴の持ち主で、帰国後はドイツ・ロマン主義の学会シンポジウムなどで活躍されていた。

その後、あれはいったいいつのことだったろう。私がまだ非常勤時代、大隈会館で例年行われていた早稲田大学文学部ドイツ語担当教師の新学期懇親会だったろうか。あのとき、独文の最年長教授であり教職員組合の創設者のひとりでもあった山崎先生の座っている席に、鮮やかな紺色のオーバーを着た紳士が近づき、言葉を交わされた。春風のような颯爽とした印象であった。「あの人が山本先生だよ」と隣席の同僚から告げる声があった。後から考えると、どうやらそのとき先生は在外研究による二度目の渡独直前の時期で、そのお別れのご挨拶に見えたのだったと思う。

……あの頃の大隈会館のたたずまいが、懐かしい。明るい庭園に面した大きなガラス戸を開くと、燦燦と光が注がれ、広い芝生の上をわたってきた微風が頬を撫で、ふと振り向くとテラス近くの桜の大木が落花狼藉の雪を降らせていた。あの当時の大隈会館は、旧大隈邸ゆかりの、ゆったりしたのどかな木造建築を中心として建てられており、そこでは大学院生はもちろんのこと、学部学生であっても教員と一緒にありさえすれば楽しく談笑しながら食事をすることができた。

学びの場で研究する者は平等であるという自由で開放的な雰囲気、当時あの建物に象徴されていたキャンパスのそこかしこにはあったと思う。例の大ホテルが建つことに

なったとき、あの木造建築には歴史的な意味があるのだから、どこかに移築してでも残すようにと、学部説明会の席で一人の気骨ある教授が常任理事に要求したことがあった。理事のほうも、それは当然至極だという反応をして、聞いていた私もほっとしたものであったが、後年になって校友会に確かめたところ、移築の事実はまったくなく、単なる空手形だったことがわかり、跡地に慥然と立ちつくす思いになったものである。

あの頃あたりから、早稲田大学の歴史は大きく変わり始めたのだと思う。そして今、山本先生がご退職するにあたり、時代はまたひとつの区切りをつけようとするかのようである。ギリシャ神話で言えば、黄金の時代あるいはそれに続く銀の時代が終わり、青銅、鉄の時代を迎える時期なのだろうか。私はこの大きな時の流れに臨んで、過ぎ行くものへの喪失感をどうしても禁じえない。それは先生が成し遂げられた優れた研究業績を仰ぎ見てというばかりではなく、むしろ、あの旧大隈会館の空気を呼吸したことのある者が抱く一種の感懐であるだろう。なぜなら、先生が長年在籍しておられた学部のドイツ語担当者会議には実に明るい陽光の降り注ぐ風通しのよい古風な建物さながらの開放感があったからである。その中心には常に変わらず温厚な山本先生がいて、時に散らかりがちな私たちの議論を箒で掃き集めるように導いてくださっていた。言動がときに中庸を離れ非現実な理に傾きやすい私など、どんなにその恩恵に与かっているか知れない。

しかし、ご自身のためにはこの新しい生活の幕開けはまことに慶賀すべきことであるに違いない。先生はこのところ長年携わってきたドイツ・ロマン派の理論的支柱であるフリードリッヒ・シュレーゲルを参照しながら、その兄にあたるアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルを対象とした研究論文を継続して執筆中であり、ヨーロッパ文学運動史に名高いこの人物に光を当てた本格的な研究はまだわが国にはほとんどないこともあって、かなり困難な題材であるはずなのに、一人果敢にそれに取り組もうとする旺盛な探究心を示している。その様子からして、先生が今後もこの方面で有益な仕事を着実に続けていかれるであろうと勝手な願望をここに記しても礼を失することにはなるまい。こうした仕事に先生がこれからは思う存分専念できるであろうことを考えれば、私たちにとって喪失などと悲しむ理由がどこにあるだろうか。

過日、今後の計画についてお尋ねしたところ、むしろご自身はドイツ語より日本語をこれからは楽しみたいといっておいでだった。そのとき私には上記のような潜在的願望

から、いやいやまだまだどうして、という気持ちがあった。しかし翻ってよく考えてみると、日本語を読みたいとおっしゃるその言葉には十分な理由と背景がありそうである。そもそも、ドイツ文学を志す以前に先生が学部大学生として専攻しておられた最初の対象は国文、それも日本の現代詩であった。

山本定祐先生は1954年に早稲田大学第一文学部国文専修に入学され、その4年後の1958年に卒業後同学部独文専修に学士入学されている。国文専修時代の卒業論文のテーマは村野四郎の詩であったという。年譜によれば村野四郎という詩人は、東京都北多摩郡府中で父祖代々酒問屋を営む家の出身であり、当時の府立第二中学校を卒業する前後から句作によって荻原井泉水に認められ、自由律、季題無視の新傾向俳句に没頭、その後現代詩に転じては詩誌「新即物性文学」を発行し、いわゆるドイツのノイエ・ザハリヒカイト文学に傾倒した人である。つまりこうした土着から出てモダンを志向する当時の典型的な知性を学生時代に研究テーマとして選択したとき、既に山本先生の後年の歩みが刻印されたともいえるのである。先生は現在とくにフリードリヒ・シュレーゲルの研究者として知られているが、ドイツ文学研究の出発点にあたっては、ゴットフリート・ベン、ゲオルク・トラークル、リルケなどの詩人についての論文を発表しておいでだったことを忘れてはなるまい。

その後先生は大学院文学研究科独文修士課程、同博士課程へと進まれ、1963年からは早稲田大学高等学院の非常勤講師、その2年後には同教諭に任ぜられ、ドイツ語教育と研究とにあたられた。そして1969年の10月から翌年の9月まで日本ゲーテ賞によってドイツのフランクフルト大学に留学されたのである。その受賞論文はゲーテの自然科学論を対象としたものであったが、当時このテーマを選んだのは後年このドイツ文学の興隆期における他の作家を扱うに際してもゲーテがいわば座標軸になると考えたからだそうである。まさしくその正道に就く者のごとく、帰国後先生がドイツ・ロマン派に関する著書を次々と発表されたことは周知の通りである。

1973年には早稲田大学商学部専任講師、1975年に助教授、1980年に同教授に任ぜられ、1982年から翌年までドイツ・ミュンヘン大学の在外研究後、1985年以来現在に至るまで早稲田大学大学院文学研究科兼任教授として大学院生の教育にもあたられている。その公平な卓越した指導によって令名つとに高く、中央大学文学部、東京大学教養学部、同文学部、共立女子大学文芸学部、明治大学文学部等でも非常勤講師として教鞭を

とられたことがある。学外の学会関係では、ドイツ語学・文学振興会理事および日本独文学会学会誌の編集委員を長年にわたって勤められた。因みに私は商学部採用されるまで残念ながら直接ご自身から薫陶を受けたことはないが、それ以前に発表したいいくつか未熟な拙論に先生が目を通してくださっていたことを知り、若い頃にはそれをひそかな誇りとしたものである。

先生の文章は日本語としてまことに読みやすく、難解な哲学・文学を論じていても整理された落ち着いた筆致に釣られて共に流れるように滑るように読み進んでしまうところがある。さすが国文専修と失礼ながら声をお掛けしたくなるが、その才能が生かされているのは研究の専門領域にとどまらず、ご自身では業績に数えておられないE・T・A ホフマン：リスベート・ツヴェルガーの『くるみわり人形とねずみの王様』の童話絵本翻訳にもいえることである。きっとお宅のご息女たちは幼い頃このファンタスティックな本を読み聞かせていただいたことだろう。枯れて渋みのある、あのゆったりとしたさび声が、今後職場ではもうお聞きすることができないと思うと、まことに私も名残惜しい気がする。安定した先生のお声は授業でも学生の評判がことのほか高く、つい安らかな眠りに誘われる者も少なくなかったはずである。こういう冗談がご退職にあたってさえ許されるというところにも、先生の寛容なご人徳の一端がうかがわれないだろうか。

かくして日本文学は先生にとってドイツ文学に進む以前の母胎であり、そこに再び立ち帰ろうとするこれからの歩みもまたきわめて当然の大道を行くそれであろうと思われるが、現実を振り返ると、商学部のドイツ語教室はまことにその慈父のごとき支柱を奪われようとしている。しかし、それがいかんともしがたい世のならいであるからには、残された兄弟たちがその開放的な家の遺風を守っていくしかないのである。先生のご健康とご長寿とを心からお祈りすると共に、これから私たちに旧大隈庭園の薫風のような便りを幾久しく寄せていただきたいと切にお願い申し上げたい。明治村の小さな蝸牛庵や漱石旧居にはもう住む人もいないが、学苑のユートピアを心の故里とする住人はまだ決して少なくないだろうと念じつつ。

主要な著訳書・論文等

著 書

『世紀末ミュンヘン ユートピアの系譜 』（朝日選書）1993年 朝日新聞社

翻 訳

ベーダ・アレマン 『イロニーと文学』 1973年 国文社

ベーダ・アレマン 『リルケ 時間と形象 』 1977年 国文社

Fr. シュレーゲル 『ロマン派文学論』（編訳） 1978年 富山房

Fr. シュレーゲル 「アテネウム断章」 1990年 『シュレーゲル兄弟』国書刊行会

Fr. シュレーゲル 「共和制概念試論」 1992年 『太古の夢 革命の夢』国書刊行会

Fr. シュレーゲル 「アテネウム断章」その他 1999年 『エンカルタ百科事典』
マイクロソフト社

論 文

ゴットフリート・ベンの芸術原理について 1965年 『ヨーロッパ文学研究』第9号
早稲田大学文学部

自然科学者としてのゲーテ 理念と経験 1969年 『ゲーテ年鑑』第11号
日本ゲーテ協会

ゲオルク・トラークルの世界 1969年 『ユリーカ』11月号 青土社

ドイツ表現主義の詩人たち 1970年 『ユリーカ』7月号 青土社

充実した時間としての詩 ベーダ・アレマンの場合 1975年 『ドイツ文学』
日本独文学会

眼の仕事から「心」の仕事へ リルケ論 1977年 『早稲田文学』8月号

ヘーゲルとロマン派 Fr. シュレーゲルの場合
1978年 『現代思想（ヘーゲル総特集号）』青土社

フリードリヒ・シュレーゲルとゲーテ 1979年 『ゲーテ年鑑』第21巻
日本ゲーテ協会

フリードリヒ・シュレーゲルにおける「批評」の概念 1984年 『早稲田商学』305号

ドイツ・ロマン主義研究の歴史 特集にあたって
1986年 『ドイツ文学』76号

日本独文学会

Fr. シュレーゲルとロマン主義解釈学 2000年 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』

独創と追隨のはざままで A.W. シュレーゲル試論

2005年 『早稲田商学』 第27号

分担執筆

都市と文学 1992年 『ドイツの社会』 早稲田大学出版部

Fr. シュレーゲル 1994年 『ブリタニカ国際大百科事典』 T B S ブリタニカ

ロマン派文学論(断片116) 1994年 『世界の詩論』 青土社

Fr. シュレーゲル, シェリング, ロマン的イロニーその他15項目

1996-98年 『世界文学大事典』 1-6巻 集英社

ドイツ・ロマン主義とその時代

1997年 『シェリングとドイツ・ロマン主義』 晃洋社

書 評

E. シュタイガー 『ゲーテ・上』 1981年 『週間読書人』

芦津丈夫 『ゲーテの自然体験』 1988年 『図書新聞』

『ドイツ文学における古典と現在』 1988年 『ドイツ文学』 日本独文学会

Eberhard Scheiffele: Über die Rolltreppe. 2001年 WASEDA-BLÄTTER

早稲田大学ドイツ語学・文学会

学会発表(シンポジウム)

シュレーゲルにおける批評の概念 1981年春 日本独文学会

猪 股 正 廣